

『宝物集』説話入れ替え考  
—— 妙莊嚴王説話と檀弥離長者説話の比較から ——

北 林 茉莉代

一、はじめに

『宝物集』は、平康頼が著したとされる仏教説話集である。現存する写本・版本・古筆切の膨大さからも、後世において広く受容されたことが了解される。このうち七十種以上の諸本を参看された小泉弘氏は、『宝物集』を七系統に分類した。すなわち、一卷本系、二巻本系、平仮名古活字三巻本系、平仮名整版三巻本系、片仮名古活字三巻本系、第一種七巻本系、第二種七巻本系の七系統である<sup>①</sup>。

しかし、この七系統の生成過程には諸説あり、未だ定説を見ていない。たとえば、一・三・七巻本に限定しても、小泉氏は「一卷本の祖本は、恐らく康頼が歸洛直後に物した第一稿」<sup>②</sup>、「第二種七巻本は、第一稿本と目される一卷本の改稿本」<sup>③</sup>、片仮名古活字三巻本は「廣本系より省略した後のもの」<sup>④</sup>と推定する。今野達氏は、「片仮名・平仮名両古活字三巻本系は……改竄第一種七巻本を母胎とした抄出本」という<sup>⑤</sup>。中島秀典氏は、「第二種七巻本から、まず、片仮名古活字三巻本が成立し……一卷本が成立するのは、その後」と仮

定する<sup>⑥</sup>。山田昭全氏は、一卷本から三巻本へ増広され、さらに三巻本から七巻本へ再増広されたとする<sup>⑦</sup>。また、黒田彰子氏は、「現一卷本は祖本を主として抄出したものであり、七巻本は逆にこれを増補する方向で編まれた」とする<sup>⑧</sup>。ほかにも、坂巻理恵子氏の、片仮名古活字三巻本は略本であるとしつつ「開版の際に手を加えられた」可能性を指摘するものや、高橋伸幸氏の「第二種七巻本の如き歌の多い本をもとにして歌を削除」したものが片仮名古活字本であるとする説など、枚挙に暇がない<sup>⑩</sup>。

本稿では、七系統のうち片仮名古活字三巻本と第二種七巻本を比較する。二系統の関係性については、片仮名古活字三巻本から第二種七巻本へ追補された「増補説」の立場もあれば、第二種七巻本から片仮名古活字三巻本へ抄出された「抜書説」の立場もある。拙稿では、字句の異同を検証した結果、より正確かつ引用書に近い本文が第二種七巻本であり、片仮名古活字三巻本から訂正されたものであると論じたことがある<sup>⑪</sup>。本稿では、字句ではなく採用された説話を手掛かりに、二系統の成立と特質について考察する。

『宝物集』は、一つの主張や教義を説明する際、概略を述べた直

後に例証列挙を行う。例証に使用するものは、「経説、経論、史話、説話、伝記、伝説、街談巷説、詩歌、ことわざ、金言等およそ例証にできるものはすべて」である。本稿では、これらを便宜上「例話」と称す。また、二系統の諸本を比較すると、例話が削除または補記されたことで本文の分量に大きな差異が生じている。そのため、例話の配置が前後することもしばしばである。ところが、配置だけでなく採用される説話自体が異なる場合や、登場人物は同一であつても別の逸話を引く例が見受けられる。そこで、本稿では〈話型あるいは主旨を同じくする例話〉が、それぞれのように扱われるか検証した。今回は、片仮名古活字三卷本に引かれる妙莊嚴王説話と第二種七卷本に引かれる檀弥離長者説話を主題に据える。二者の説話から、〈類話の採用基準〉を考察するとともに、〈増補・抜書どちらの蓋然性が高いか〉検討を加えたい。

なお、第二種七卷本系統には古鈔本の零本から完本まで種々の伝本が存在するが、ここでは吉川本のみを比較対象とした。引用に際しては、片仮名古活字三卷本は、山田昭全・大場朗・森晴彦編『宝物集』(おうふう、一九九五年四月)を底本として使用した。吉川本は、小泉弘・山田昭全・小島孝之・木下資一校注『宝物集 閑居友比良山古人靈託』(新日本古典文学大系40、岩波書店、一九九三年十一月)を底本とした。このほか、「大正新脩大藏經テキストデータベース」を使用し、『』内に經典名、( )にSALT番号を記載した。

食頭陀して、三人の聖人に施しき。三人の聖人果を得てき。一人の聖人と云は、今の檀弥離なり。施の功德によるが故に、今生には国王にすぐれたるたのしみありき。未来に仏に成べしといへり。

上掲のように、片仮名古活字三卷本では、妙莊嚴王の因縁譚が扱われ、淨徳夫人・淨蔵・淨眼が善知識であると語られる。一方、吉川本では、檀弥離長者の過去世が描かれ、布施の功德によって「国王にすぎたるたのしみ」を得たとされる。それぞれ話の主旨が異なるため、十二門のなかでも配される門が異なっていることがわかる。

先行研究を確認すると、片仮名古活字三卷本の頭注には、「三国伝記四の十は底本に酷似する。賢愚経十二には一人が乞食をし他の四人は九十日間専精行道させた」とある。出典とは明言されないものの、『賢愚経』『三国伝記』に類似の話があり、『宝物集』と『賢愚経』では比丘の数が異なることが指摘されている。吉川本の脚注は、經典では『賢愚経』十二、『法苑珠林』五十六、『諸経要集』六を指摘し、ほかに『三国伝記』四の十を挙げている。この「四人」という数字に対し、渡辺信和氏は、『賢愚経』と『宝物集』の間に「別の書物なり口頭での伝承」を仮定する。松村恒氏は、「王家の前身譚として同様の過去物語」があるとして、話の類似性から妙莊嚴王説話との混同が起きたと指摘する。森晴彦氏は、『宝物集』二伝本の説話が異なる点について、「善知識譚として受容したが『法苑珠林』等で『布施』の話として理解し直し、不用な誤りと考えて人名などを削除し場所を移したか、その逆か」と改訂を想定する。な

## 二、妙莊嚴王説話と檀弥離長者説話

『宝物集』の六割近くを占めるのが、「十二門開示」の記述である。これは、寺僧とおぼしき者が数名の参籠者に対し、往生の因となる十二種の行動を教授する場面である。

ここでは、片仮名古活字三卷本において「十二門開示」第九「善知識」に配置される妙莊嚴王の説話と、吉川本において「十二門開示」第七「布施」に配置される檀弥離長者の説話を比較する。

片仮名古活字三卷本 第九「善知識」(二七一―一七二頁)

昔、四人ノ聖人有ギ。山ニ籠テ行ヒケルホドニ、一人ヅ、里ニ出テ食物ヲ乞食シテ過ル程ニ、一人ノ聖人ノ云様、「唯一人シテ乞食シテ養ハン。三人ハ静ニ行テ、我後世ヲモ用イ導キタマヘ」ト云ケレバ、三人悦テ閑ニ行ケレバ、年月ヲ経テ、四人ナガラ失セニケリ。三人ハ正覚成シヌ。今一人ハ里ニ出テ乞食シケル折節、君ノ御幸ヲ見奉テ、執心ヲ止メケル故ニ、即国王ト生キ。三人ノ聖人、昔ノ契リヲ不忘シテ、一人ハ后ト成リ、二人ハ子ト成テ、父ノ王ヲ教ヘテ菩提ノ道ニ入タリキ。妙莊嚴王、淨徳夫人、淨蔵・淨眼ノ二人ノ子ト申ハ此御事ドモ也。

吉川本 第七「布施」(二七七頁)

檀弥離長者が、国王にすぎたるたのしみ有し、昔、四人の聖人ありき。三人は静に山林に籠りて行ひ、今一人は里に出て乞

お、松村氏は、妙莊嚴王説話が「『法華経』自体に説かれるのではなくて、註釈書類に見られる」ことに注意を促しつつ、『法華文句』『法華文句記』『法華義疏』の名を挙げる。

そこで、妙莊嚴王説話の原拠と仮定して『法華文句』を、檀弥離長者説話の原拠と仮定して『賢愚経』の該当箇所を検めてみると、次のようになる。なお、修行者の人数に波線を、特に注目すべき文言に傍線を付した。

『妙法蓮華経文句』(T1718\_340147a12～T1718\_340147b08)

釋妙莊嚴王本事品此因縁出他經。昔佛末法有四比丘。於法華經極生殷重。雖卷舒祕教甘露未霑。日夜翹誠晷刻無忘。歎云苟非其人乎。地非其處乎。世間紛欸靜散相乖。直爾求閑尚須厭棄況崇道乎。於是結契山林志欣佛慧。幽居日積衣糧單罄。有待多煩無時不乏。一餐喀喀。廢萬里之行。十旬九飯。屈雲霄之志。可得言哉。其一人云。吾等四窮尚不存身法當安寄。君三人者但以命奉道莫慮朝中。我一人者捨此身力誓給所須。於是振錫門閭以求供繼。自春至冬周而復始。如僕奉大家。甘苦無喜慍。三人得展其誠功圓事辦。一世之益當無量生。其一人者數涉人間。屢逢聲色坏器未火難可護持。偶逢王出車。馬駢闐旌旗囂赫。生心動念愛彼光榮。功德薰修隨念受報。人中天上常得爲王。福雖不貲亦有限也。三人得道會而議云。我免籠樊功由此王。其耽果報增長有爲。從此死已不復爲王。方沈火坑良難可救。幸其未苦正可開化。其一人云。此王著欲而復邪見。若非愛鈎無由可拔。一人可爲端正婦。二作聰明兒。兒婦之言必當從順。如宜設化果獲改

邪。婦者妙音菩薩是。昔二子者。今藥王藥上二菩薩是。昔時王者。今華德菩薩是。

『賢愚經』(T0202\_040431b06～T0202\_040431b28)

成阿羅漢。爾時阿難。及諸比丘。合掌白佛。問世尊言。檀彌離比丘。有何功德。生於人中。受天福祿。不樂世樂。出家未久即獲道果。佛語阿難。善聽當說。乃往過去。九十一劫時。世有佛名毘婆尸。滅度之後。於像法中。有五比丘。共計盟要。求覓靜處。當共行道。見一林澤。泉水清美。淨潔可樂。時諸比丘。俱共同聲。勸語一人。此去城遠。乞食勞苦。汝當爲福。供養我等。爾時一人。即便許可。往至人間。勸諸檀越。日爲送食。四人身安。專精行道。九十日中。便獲道果。即共同心。語此比丘。緣汝之故。我等安隱。本心所規。今已得之。欲求何願。恣汝求之。時彼比丘心情歡喜。而作是言。使我將來天上人中富貴自然。所願之物。不加功力。皆悉而生。遭值聖師過踰仁等百千萬倍。聞法心淨疾獲道果。佛告阿難。爾時比丘今檀彌離是。緣其供給四比丘故。九十一劫。生天人中。豪貴尊嚴。不處貧窮卑賤之家。今得見我獲道度世。爾時阿難。及諸比丘。聞佛所說。各自勸勵。精進修道。有得初果乃至四果。有發曠濟之心住不退者。各各喜悅。頂戴奉行。

二者とも忘己利他を実践しているが、前者は「四比丘」の一人が目にした王の車に「生心動念」し、後に「邪見」の王と生まれることが示される。ここで否定的に描かれるのは、『法華經』において

### 三、増補説の検討

前節では、二つの話の混同が行われた作品が『宝物集』であり、修行者の数は無意識的な改変であつただろうことを確認した。それでは、説話の題材自体が妙莊嚴王から檀弥離長者へ変更されたのは、果たして無意識的な営為であつたのだろうか。本節では、増補説に立ちながら、二、三の可能性を提出しておく。

第一に、片仮名古活字三卷本は記憶に拠つて記述したものの、原拠を調べた際に檀弥離長者の話しか見出せなかつた可能性がある。しかし、注釈書にしかない前生譚とはいえ、「十二門開示」の第十一に「法華經」を配するほど『法華經』を重視する作者が、注釈書を軽視するだろうか。そこで、吉川本の脚注を手がかりに『法華文句』『法華文句記』『法華義疏』の使用状況を調べてみると、一七四頁において「定業よくてんじ、大悲苦にかはり給ふ」の一文があり、脚注で「『定業亦能転』は法華經文句記十の句」と指摘されていることがわかる。また、三三二頁の「可金玉三千只養身。一句といへども永劫資神」が「この句、法華文句記十六の『一句染神。威資彼岸』の句と関連するか」とある。さらに、山田昭全氏は、『宝物集』は普安王の故事を披露した直後、この話の詳細は『五王經』にあると明示する一方で、妙樂大師(湛然)も『法華經』の「往詣仏所」の句を説明するところで引用している<sup>21)</sup>。事実上、『宝物集』作者が『法華文句記』を読み、『五王經』の所在を知つて改めて『五王經』を読みなおしていたこと<sup>22)</sup>を示唆するという。これらの事実第一の可能性を否定するものである。これはつま

妙莊嚴王が外道に傾倒し、他の三人によつて仏教に帰依する話の布石とするためであろう。後者は「五比丘」のうちの一人が行乞を一手に引き受け、それを四人に与えたことで檀弥離長者となつたと語られる。過去世における比丘は「富貴」と「聖師」と「道果」を同時に望むことで、檀弥離長者となつた現世で悟りを得ることが約束されるのである。ここに否定的要素は見受けられない。『賢愚經』では、残る四人のその後は描かれず、あくまでも檀弥離長者が主軸である。二つの説話は、前世の功德によつて王や長者へ転生する類型を有しているが、趣を異にしている。しかし、これは詳解すれば理解できる程度の微妙な差異である。

一見すれば、比丘という立場や、志を同じくする者と修行に励む境遇、ただ一人乞食する行為、その功德により王や長者に生まれる致富譚であり前生譚である話型など、二者はかなり酷似していることが了解できよう。松村氏は、「檀弥離長者前生話には元来三人の修行者しか登場しないが、ここで四人となっているのは妙莊嚴王前生話の影響による変更」であり、これは「無意識のうちに行われた」ものだといふ<sup>20)</sup>。

稿者も、数字に関しては同様の立場を取る。なぜなら、吉川本において「檀弥離長者」という固有名詞を明示するにもかかわらず、出典を精査していないとは考えにくいからである。『賢愚經』・『法苑珠林』・『諸經要集』などを参照した筈の作者が、原文の「五比丘」を「四人の聖人」とするのは、片仮名古活字三卷本の段階で引いた妙莊嚴王説話が念頭にあつたためだと考えるのが自然である。

り、やむを得ず例話を変更したのではなく、意図的に変更したことを示しているのではないか。その仮定のもと、第二、第三の可能性を探っていく。

第二に、例話を重複して引くことを避けた可能性がある。吉川本において妙莊嚴王と淨藏・淨眼らの話は「子が宝」および「善知識」で引かれており、また、「善知識」のなかで「こ、をもて、法花經にも、『善知識者是大因縁』とはとかれて侍るなり」と妙莊嚴王本事品の主旨ともいえる句が引かれている。その分量は決して多くないものの、人口に膾炙した話をくどくどしく引くことを憚つたことが考えられる。「善知識」の段には片仮名古活字三卷本を上回る話群が補足されているため、妙莊嚴王の前生譚はとりたてて必要としなかつたのではあるまいか。その代わりに、「布施」の肉付けとして檀弥離長者前生譚が選択されたのだと考えられる。

第三に、より「十二門開示」の性質に即した例話に変更した可能性がある。「十二門開示」は、「わかやかなる女」に往生の方法を問われ、因となる十二の行動を伝授する。そこには発問者の「わかやかなる女」ばかりでなく、ひいては物語読者へ、往生への行動を促す意図があるう。妙莊嚴王の例話では、動作主の妙莊嚴王が乞食頭陀して王に生まれる点においては能動的であるが、「善知識」となるのは残る三人の比丘である。つまり、「善知識」をテーマとする本話において、導かれる妙莊嚴王は受動的と言わざるを得ない。一方、檀弥離長者の例話では、自発的な行動によつて「未来に仏に成」のであるから、「十二門開示」が説かんとする、自らの行動を往生の因とする内容に即している。それゆえ書き換えが行われ、吉

川本の「善知識」に残った妙莊嚴王の要素は「妙莊嚴王の二子の例なり。善智識と申べきなり」(三二〇頁)のように簡略化し、内容も淨藏・淨眼に比重が置かれていないだろうか。その比重こそ、第二種七巻本の「十二門開示」の性質、すなわち、〈例話においても実践的行為を行った人物を中心に据える性質〉を示していると考えられる。これは、読者に行動を勧めるための意識的書き換えではないか。

このように、二つの説話の入れ替えは、意識的に行われたものと考えられる。なお、ここまでは「増補説」に立った場合の推定であった。次項は、拔書説の立場から検討を加える。

#### 四、拔書説の検討

つぎに、拔書説の立場で検討すると、第二種七巻本の「布施」にある檀弥離長者説話は、片仮名古活字三巻本には継承されなかったことになる。では、「布施」の内容に変化はあるか。ここでは、「布施」の段それぞれの例話の中心人物を登場順に列挙し、共通する人物に傍線を付して示した。なお、表記に相違はあるが、同一人物あるいは同話とみなせる場合は、注に示したうえで線を引いた。

片仮名古活字三巻本「布施」の例話は、尸毘王、薩埵王子、雪山童子、身子尊者、須陀那太子、無勝童子・徳勝童子、貧女、阿那律、海日大王、光明王ノ后が話の中心的人物であるが、そこに檀弥離長者の名は見えない。

吉川本の「布施」には、尸毘王、薩埵王子、雪山童子、舍利弗尊

者、須多拏太子、貧女、目連尊者の弟、檀弥離長者、天竺の絵師、末利夫人、金剛女、阿難、祇域長者、光明〔皇〕后、阿那律、戒日大王の逸話が載る。

第二種七巻本から片仮名古活字三巻本に変化したと仮定した際、目連尊者の弟、檀弥離長者、天竺の絵師、末利夫人、金剛女、阿難、祇域長者が一挙に削除され、無勝童子・徳勝童子の逸話だけが増補されたことになる。この無勝童子・徳勝童子の話は、以下のように記されている。

片仮名古活字三巻本（一六五頁）

仏ケ、天竺ニヲワシマセシ時、無勝童子・徳勝童子トテ兄弟二人ノ童子アリケリ。仏ニセメテ、物ノ参セタサニ、砂ヲ手ニ入テ供養シタリケルニ、今、阿育大王ト生テ、未来成〔仏〕ノ報ヲ得タリキ。

この話もまた、前世の布施の功德により王と生まれ、「未来成〔仏〕ノ報ヲ得」る点が妙莊嚴王、檀弥離長者と共通する。それゆえ拔書の場合、檀弥離長者を削除した代わりに引かれた可能性も否めない。

そこで、「布施」のなかで話の内容が異なる例話、すなわち、片仮名古活字三巻本で「光明王ノ后」、第二種七巻本で「光明〔皇〕后」とされる人物の記述を検討する。

片仮名古活字三巻本（一六六頁）

吾朝の御門ハ、春ノ歳失セ、秋ノ菓ミ不熟程ニ、賑給施米トテハ行給ゾカシ。光明王ノ后ノ、世ノ末ノス、メノ為ニ施シタリシ田コソハ、今ノヤク田トハ申ヌレ。

吉川本（二七九頁）

天竺・震旦までは申さじや、光明〔皇〕后の、湯をわかして十方衆生にあげせ給ひて、一日に三人が垢をすり給ひけるに、おそろしげなる癩の、「わが垢すりて給はれ」と申ければ、願をやぶらじがために、ひそかにすり給ひて、「我、汝が垢すりたりと人になひひそ」とのたまひければ、此癩、光をはなちて、「汝はまた、阿闍仏の垢すりつと、人にかたるな」とて、かきけすやうにうせにけるといへり。

片仮名古活字三巻本の「光明王ノ后」という人名は不審であるが、前文に「吾朝の御門」とあることから、日本の天皇の後であるとわかる。この后が「施タリシ田」とは、前文の「施米」を受けた単なる「田」とも考えられるが、ここでは福田思想に基づくものと解釈した方がよいのではないだろうか。『例文仏教語大辞典』では、「福田」は以下のように説明される。

田がよく物を生ずるように、福德を得させる人や対象のこと。仏や僧、父母、貧者などを敬い、施しを行うとき、多くの福德を生み、功德が得られるところから、これを田に喩えていう。仏を大福田といい、仏や僧を恭敬福田（敬田）、父母や師を報恩福田（恩田）、貧者や病者を貧窮福田（悲田）などという。

するために、吉川本の「光明皇后」の例話は単なる布施ではなく、阿難、祇域長者に続く施浴伝説でなければならなかったものと解される。

第二種七卷本は、人名が正しく、その人物の逸話を詳述し、なおかつ前の二話を補強する内容となっている。第二種七卷本から片仮名古活字三卷本へ抜書したとするなら、例話の連続性を断ち切り複数話を削除したうえ、曖昧な「ヤク田」の記述へ修正しなければならぬが、この変更に積極的理由は見いだせない。このことから「抜書説」を否定せざるを得ず、「増補説」に則って無勝童子・徳勝童子は話型を同じくする檀弥離長者へ変更し、光明皇后の話の内容を変更したと解す方が自然である。この作業と並行して、話型が類似していた「善知識」の妙莊嚴王説話も削除され、結果として「布施」に檀弥離長者の例話が残存したのであろう。

## 五、おわりに

ここまで、片仮名古活字三卷本では「善智識」に、第二種七卷本では「布施」にある、妙莊嚴王と檀弥離長者の前生譚を検討してきた。両者とも過去世における修行者の数を「四人」とするが、正しいものは妙莊嚴王のみである。正確性を増す筈の第二種七卷本において、檀弥離長者の「四人の聖人」は出典の「五比丘」と一致しない。ここには、妙莊嚴王と檀弥離長者の説話の混同があり、数字に関しては無意識的な変更であったろうことを理解した。

しかし、説話の入れ替え自体は、ごく意識的に行われている。片

仮名古活字三卷本では話型を同じくする妙莊嚴王と無勝童子・徳勝童子がそれぞれ「善知識」「布施」に引かれていたが、第二種七卷本へ増補する過程で、これらの話は削除または簡略化された。それは、類話を重ねて用いることを避ける意図もあったであろうし、十二門開示の性質に沿った改変でもあったであろう。この性質とは、換言すれば、〈実践的行為を主体的に行った人物〉を中心に据えるという作者の意図である。「善知識」に助けられる妙莊嚴王の代わり引かれたのは、十二門の行為「布施」を実践した人物、檀弥離長者の説話である。この際、作者はおそらく『賢愚経』などの經典にあたって詳細を記述しているものの、妙莊嚴王の前生譚が影響し「四人の聖人」という誤謬を犯している。他本の記述が影響したこによる誤りは、片仮名古活字三卷本に深く関わった人物の改稿本であることも示唆している。

また、「布施」の例話を比較すると、第二種七卷本には〈例話の連続性〉が確認できた。さらに、光明皇后の例話では同一人物を取りあげるものの、内容が異なっている。ここでも、第二種七卷本には施浴説話を扱う〈必然性〉を確認した。この二点は「抜書説」では説明が困難であり、片仮名古活字三卷本から第二種七卷本へ増広した「増補説」を採用すべきとの結論に至った。

以上、妙莊嚴王説話と檀弥離長者説話を中心に据えつつ、無勝童子・徳勝童子説話、光明皇后説話の検討を行った。その結果、『宝物集』では類似する話型の例話が入りし、一見混同と思われる現象が起こっているが意図的な改変であること、説話の取捨選択はかなり厳密な意図のもとに行われたであろうことを了解した。また、

記述の正確性や、例話の連続性から、片仮名古活字三卷本が第二種七卷本へ増広されたと考えるのが穏当であろうとの結論を出した。無論、この一例のみで全体を論じることが不可能であるため、今後も同様の例を報告する予定である。

## 【注】

(1) 小泉弘『古鈔本寶物集 研究篇』(貴重古典籍叢刊第八巻、角川書店、一九七三年三月) 九〇二七頁。

(2) 注(1)に同じ。二二九頁。

(3) 注(1)に同じ。二二三頁。

(4) 注(1)に同じ。二〇頁。

(5) 今野達『今野達説話文学論集』(勉誠出版、二〇〇八年四月) 六〇一頁。

(6) 中島秀典「宝物集諸本の系統論に関する一考察——第二種七卷本における増補記事を手懸にして——」(『緑岡詞林』第六号、一九八二年三月)

(7) 山田昭全『宝物集研究』(山田昭全著作集第二巻、おうふう、二〇一五年一月) 三一頁など。

(8) 黒田彰子『中世和歌論攷——和歌と説話と——』(和泉書院、一九九七年五月) 二二六頁。

(9) 坂巻理恵子「『宝物集』小攷——和歌的な記述をめぐって——」(『横浜国大國語研究』第十三号、一九九五年三月)

(10) 高橋伸幸「片仮名古活字三卷本「宝物集」の成立——「宝物集」諸本の問題点——」(『説話文学研究』第三十号、一九九五

年六月)

(11) 北林茉莉代「静嘉堂文庫蔵片仮名古活字三卷本『宝物集』における本文の問題——十二門開示「道心」「三宝」「持戒」を中心に——」(『国文学試論』第二十五号、二〇一六年三月)

(12) 山田昭全氏は、吉川本(岩波新日本古典文学大系40)解説に、例証列挙の五原則を挙げる。ここでは、そのうち一項目を引用した。五一頁。

(13) ここでは、吉川本における「十二門開示」の頁数と全体の総頁数から算出した。

(14) 片仮名古活字三卷本(おうふう) 頭注、一七二頁。

(15) 吉川本(岩波新日本古典文学大系40) 脚注、二七六―二七七頁。

(16) 渡辺信和「天竺の長者説話——西行物語の檀弥離をめぐって——」(和漢比較文学会編『説話文学と漢文学』、汲古書院、一九九四年二月)

(17) 松村恒「檀弥離長者伝承の変容」(『印度學佛敎學研究』第四十巻第一号、一九九五年十二月)

(18) 森晴彦「『宝物集』片仮名古活字三卷本下巻考——『往生要集』との関わりから——」(『宝物集研究』第一集、一九九六年五月) (19) 注(17)に同じ。

(20) 注(17)に同じ。ここで「三人の修行者」とあるのは、「五人」の誤りであろうか。

(21) 吉川本(岩波新日本古典文学大系40) 五一―四頁。

(22) 以下、吉川本における妙莊嚴王の記述と、比較のため片仮名古

活字三卷本の妙莊嚴王の記述を抜き出した。なお、「子が宝」の出典に関する記述、すなわち、片仮名古活字三卷本「コマカニ法華経二見ヘタリ」と、第二種七卷本の「委は法花経の八巻にとけり」の巻数も見落とすべきではない。小さな異同ではあるが、第二種七卷本において引用経典がさらに詳細になり、記述が正確になった事例の一つと考えられる。

#### 吉川本「子が宝」(三二頁)

加之、大目鍵連は青提女が飢を助け、又淨藏・淨眼の二子は、妙莊嚴王を導て菩提の道に入事也。

(中略)

妙莊嚴王の、邪見にて仏法を知ざりしを、淨藏・淨眼の二子、神通を現じて、親に見せて菩提の道にいれし事也。委は法花経の八巻にとけり。

#### 吉川本「善知識」(三二〇頁)

妙莊嚴王の二子の例なり。善智識と申べきなり。世の人、多田の新発意とぞ申侍りける。

#### 片仮名古活字三卷本「子が宝」(三〇頁)

加之、大目鍵連ハ母ノ青提女ガ飢ヲ助ケ、淨藏・淨眼ノ二人ノ子ハ、邪見ノ嚴王ヲ導テ菩提ノ道ニ入タリキ。

(中略)

又、妙莊嚴王ハ、邪ナリシカドモ、淨藏・淨眼二人ノ子、様々ノ謀ヲ廻シテ、仏ノ御所ニ具シテ参テ有シ事ナリ。

福田「三福田」「四福田」「八福田」の項参照。

(27) 以下、『国史大辞典』(第八巻、吉川弘文館、一九八七年十月および第十一巻、吉川弘文館、一九九〇年九月)より「施薬院」「悲田院」の一部を引く。

#### 「施薬院」

病者に薬を施し治療する施設。「やくいん」ともいう。『続日本紀』に天平二年(七三〇)皇后宮職に施薬院を置き、皇后宮職の封戸と藤原不比等の功封の庸物により諸国が購入した草薬を進上させたとある。光明皇后の意志により創設され、皇后宮職が紫微中台と改称されてもその官人が運営にあたり、東大寺正倉院の人参や桂心も下賜され、死者にも関係していたらしい。光明皇太后の崩後は、乾政官のもとで知院事二名が置かれ、官号が旧に復した太政官に続く。(中略)このほかに、『四天王寺御手印縁起』に聖徳太子創設という四院に施薬院があり、九世紀には存在していたらしい。『扶桑略記』には養老七年(七二三)に興福寺に施薬院が置かれたとあり、『続日本紀』には天平宝字元年(七五七)山階寺(興福寺)施薬院に越前国の壘田百町が施入されたとある。↓四院、↓崇親院

「参考文献」新村拓『日本医療社会史の研究』(水野柳太郎「悲田院」

仏教の福田思想にもとづき貧窮孤独の人を寄住させて飢渴を救う施設。聖徳太子が四天王寺四院の一つとして建てたという伝説もあるが、養老七年(七二三)大和国の興福寺

コマカニ法華経二見ヘタリ。

#### 片仮名古活字三卷本「善知識」(二七一―二七二頁)【再掲】

昔、四人ノ聖人有キ。山ニ籠テ行ヒケルホドニ、一人ヅ、里ニ出テ食物ヲ乞食シテ過ル程ニ、一人ノ聖人ノ云様、「唯一人シテ乞食シテ養ハン。三人ハ静ニ行テ、我後世ヲモ弔イ導キタマヘ」ト云ケレバ、三人悦テ閑ニ行ケレバ、年月ヲ経テ、四人ナガラ失セニケリ。三人ハ正覚成シヌ。今一人ハ里ニ出テ乞食シケル折節、君ノ御幸ヲ見奉テ、執心ヲ止メケル故ニ、即国王ト生キ。三人ノ聖人、昔ノ契リヲ不忘シテ、一人ハ后ト成リ、二人ハ子ト成テ、父ノ王ヲ教ヘテ菩提ノ道ニ入タリキ。妙莊嚴王、淨徳夫人、淨藏・淨眼ノ二人ノ子ト申ハ此御事ドモ也。

(23) 片仮名古活字三卷本では「身子尊者ハ、乞眼婆羅門ニ眼ヲトラセキ」(二六三―二六四頁)、吉川本では「舍利弗尊者、眼を乞眼の婆羅門にとらせしなり」(二七四頁)と語られるが、各経典に見える名は「舍利弗尊者」である。これは片仮名古活字三卷本の誤りを吉川本で訂正したものの一例であろう。ここでは「身子尊者」と「舍利弗尊者」の名に異同はあるものの、同話であるため線を引いている。

(24) 片仮名古活字三卷本の「光明王ノ后」と吉川本の「光明〔皇〕后」は同一人物と考えられるため、線を引いている。

(25) 石田瑞磨『例文仏教語大辞典』(小学館、一九九七年三月)「福田」の項参照。

(26) 中村元『広説佛教語大辞典』(東京書籍、二〇〇一年六月)「二

(山階寺)に創建されたのが初例。天平二年(七三〇)篤信の光明皇后により施薬・悲田の両院が皇后宮職に設置され、封戸四千戸の庸物を主な財源として天平宝字八年(七六四)ころまで機能した。平安京では九条南に東西悲田院が官設されたが、十世紀後半に東五条鴨河西に移設された。施薬院が医療に重点をおいたのに対し、悲田院は孤窮人の収容と京城内の死体処理を行い、預・雑使・乳母らが正税出挙のほか藤原氏の封戸・荘園収入を財源として十二世紀半ばまで機能。(後略)

「参考文献」新村拓『日本医療社会史の研究』(新村拓)

(28) ただし、金剛女について、吉川本(岩波新日本古典文学大系40)脚注では「この王女が長者の奴婢であり、麻布を僧衣に仕立てて僧に施した話は所伝がない。経律異相ではこの金剛女の話の直前に波羅奈王の娘の金色女の前生譚が載る(大正蔵五十三)……宝物集はこの金色女の話を直後に並ぶ金剛女の話と錯覚したか」と指摘されている(二七七―二七八頁)。第二種七卷本は誤りを正すために經典を原拠としているが、經典にあたったが故に混同が生じた例として理解できよう。

(29) 大場朗『宝物集の研究』(おうふう、二〇一〇年三月)四〇―一五六頁。